

伊勢神道の形成と度会行忠

——『大元神一秘書』の成立をめぐる——

高橋 美由紀

はじめに

数ある伊勢神道書の中で、その理論形成に影響を与えた外来思想について考える際、見逃すことのできない書物に『大元神一秘書』（以下『一秘書』と略称する）がある。本書は伊勢神道書の述作に用いられた典籍類の出典集ともいべき書物で、『日本書紀』や『古語拾遺』等の日本の古典はもとより、道家の典籍や儒書、仏書からの引用文を中心として構成されている。それ故、もし本書の著者や成立年代が明らかになれば、伊勢神道論の形成過程や思想構造の解明に大きな手がかりを与えることになることは疑いない。このように本書は伊勢神道の形成を考える上できわめて重要な書物であるにもかかわらず、従来の研究ではあまり顧みられることがなく、その著者や成立年代についても本格的な検討が加えられないことなく今日に至っている。そこで本稿では、まず本書の述作者と成立時期の検討を行い、次に神道五部書との比較検討を通して伊勢神道の成

立について照明をあて、最後に伊勢神道の形成に果たした度会行忠の役割について若干の考察を加えたい。

一 『大元神一秘書』の述作者とその成立時期

本書の著者及び成立時期についてまとまった説を述べたものとしては、管見に触れた限りでは昭和十二年刊の『神道大辞典』の「大元神一秘書」の項が唯一のものであり、昭和三十二年に刊行された『度会神道大成・前篇』所収の本書の解題は全く『神道大辞典』の説を踏襲したものである。そこで『神道大辞典』の説をみると、著者については、「鎌倉末期に外宮神道者の手に成」ったとし、その成立時期について、「書名は元応二年撰の『類聚神祇本源』に見えてゐるのが初見で、次いで翌元亨元年の『高宮盗人闖入怪異事』の注進状にも載せられてゐる。文中に大神宮神祇本紀（倭姫命世記の別名）を引いてゐるから、神道五部書の成立以後、元応二年以前のものと見られ」と述べている。

この説について改めて検討してみると、まず上限については、事実『一秘書』の「御饌都神」の条に、「太神宮神祇本記下曰」として『倭姫命世記』の冒頭の部分が引用されており、問題はない。しかし、下限については問題がある。というのは、『類聚神祇本源』にも『高宮盗人闖入恠異事』の中にも『大元神一秘書』なる書名も、本書からの引用と思われる文章も全く見出すことができないからである。僅かに後者の文中に、

披_二神道神一之秘書_一。窺_二内證外用之元始_一。一高宮殿中靈鏡事。

秘書云。夫以。泰山府君。或居_二東方_一。而為_二万物之首_一。或參_二北辰_一。而為_二群靈之長_一。運之增長。莫_レ不_レ依_二其冥察_一。

命之巡寄。莫_レ非_二其扶持_一云云。(傍線筆者)

と、「神道神一之秘書」なる言葉が見えるので、或はこれを以て『一秘書』を指すとみたのであろうか。しかし、それにしては次の「秘書云」という文は『一秘書』とは全く関係の無いものであり、その他本書中に『一秘書』から引かれたと思われる文章も字句も全く認められない。「神道神一之秘書」を以て『一秘書』を指すものと断ずるには根拠がきわめて薄弱であるといわねばならない。要するに、『神道大辞典』の下限の設定は根拠があいまいで支持することはできない。

そこで、本書の成立時期及び撰者について改めて私なりの検討を加えることとしたい。まず、本書の成立期の上限については、先にも述べたように、「御饌都神」の条に、

太神宮神祇本記下曰。天地開闢之初。神宝日出之時。御饌都神

与_二大日靈貴_一豫結_二幽契_一。永治_二天下_一。言寿宮。肆或為_二日為_一月。永懸而不_レ落。或為_二神為_一皇。常以無窮云々。

とあることから明らかである。ここに引かれている「太神宮神祇本記下」なる書は、既に西田長男博士が明らかにされている如く、『倭姫命世記』（以下『世記』と略称する）の別名である。事実、

この文は『世記』冒頭の言葉とほぼ一致している。故に、本書が『世記』成立以後の書であることは明らかである。それではこの

『世記』の成立はいつか。西田氏は『世記』が「太神宮神祇本記下」と別称されている点に着目し、これと対をなす「太神宮神祇本記上」に当るのが『神祇譜伝図記』であることを明らかにされた。そして、『譜伝図記』が文永七年（一一七〇）から弘安八年（一一八五）の間の成立であることを指摘し、従ってこれと対をなす『世記』もまたほぼ同時期に成ったものとされた。他方、久保田収氏は、西田説をふまえてつ更にその時期を限定し、建治三年（一一七

七）から弘安三年（一一八〇）の間とみておられる。⁽⁴⁾以上の先学の研究を参考にするならば、『世記』を引くこの『一秘書』の成立も西田説に従えば文永七年、久保田説に従えば建治三年以前には遡ることがないということになる。問題はその成立期の下限である。その解明の手がかりを私は『一秘書』の内容そのものの中に求めたいと思う。

まず、『一秘書』の構成とそれぞれの項目に引用されている典籍名、引用条文数を一覽表にすると次のようになる（括弧内の数字が引用条文数を示す）。

人皇	豐受太神 天照太神	伊弉諾尊 伊弉冉尊	惶根尊 面足尊 大苦辺尊 大戸之道尊 沙土煮尊 泥土煮尊	豊斟淳尊 国狹槌尊	国常立尊	(天地開闢)			構成
河上公注老子(2)	老子述義(2) 河上公注老子(1)	老子述義(2) 道德經云(1)	老子(1)		老子(1) 河上公注(1) 道經曰(1)	老子述義(3) 莊子(2)	道家	漢籍	引用
周記正義(1)		春秋穀梁傳(1) 周易(2)					その他	その他	用典
	大日經疏云(1) 釈摩訶衍論(2)	円覚經序(1)			秘藏宝鑰(1)		仏典		典籍
日本書紀(1)		代讚章記云(1)						その他	
古語拾遺(1)					日本書紀(1)	日本書紀(1)			

仁義礼智信	祭服	神宮貴左事	宮処	官長	神主	御饌都神	社稷神	人皇
		河上公注老子(3) 河上公注老子(1) 河上公注老子(1)	河上公注老子(1) 河上公注老子(1)	河上公注老子(2) 河上公注老子(4) 河上公注老子(2)	河上公注老子(1) 道經曰(1)	河上公注老子(1) 老子(1)	河上公注老子(1)	
	宋春秋書曰(1) 春公羊傳(1) 尚公羊(1) 礼記(1) 論語(1)			周禊云(1)			事始云(1) 尚書大傳(1) 龍名曰(1) 積魚名曰(1) 禮記(1)	
				覺王開關神呪(1)				
	東宮切韻曰(1) その他(1)		神祇式(1)	日本書紀(1) 解除云(1) 三月上巳祓禊(1)	不 明(3)	太神宮神祇本記(1)		その他(1)

信 心	河上公注老子 (1)		
所 請 事	老子 (1) 君平云 (1)	真 言 云 (1)	文鏡秘府論 (1) 古語拾遺 (1) 類音次序云 (1)
文 起			
日 月	古今篆隸文体云 (1)	無 量 寿 經 (2)	

一見して明らかかなように、道家関係の書、からの引用が多く全体の約半数を占めており特に『老子』及びその注釈書である『河上公注』・『老子述義』への依存度の高さが目立つ。又、内容的にみると、宇宙論(天地開闢の項)、根源神としての国常立尊観(国常立尊の項)、神人関係論(神主・官長の項)等のいわば伊勢神道論の根幹をなす部分が主として道家の書からの引用に依っている点が注目される。

ところで、数多い伊勢神道書の中で道家思想との関連の深い書として想い起されるのは度会行忠の著わした『伊勢二所太神宮神名秘書』(以下『神名秘書』と略称する)である。その端的な例は、「古天地未割。……于時天地之中生一物。状如葦芽。便化為神号三国常立尊。」という『日本書紀』天地開闢段本文の引用の後に付された割注に見ることができる。今、煩を厭わず引用すると次のような文章である。

竊就三古事。粗考二元始。古天地未分。神聖未形。湛然凝寂

為三万化之本。謂三諸神之本也。杳冥恍惚莫測。涯際。天法道而精氣自成。地法天而万物生長矣。惣道始無三形状二而能為三万物設三形象。生三於虛無之中。受三大意之象者也。故曰。道生三陰陽。々々生三和清濁。三氣分為三天地人。々々生三万物。若道散為三神明。流為三日月。分為三五行。万物之撰散則為三器用也。肆謂無名則天地之始。或曰。無名者謂道。道無三形。故不可名也。始者道。吐三氣布化。出三於虛無。為三天地之本始也云々。有名則万物之母。或曰。有名謂三天地。々々有三形位。有三陰陽。有三柔剛。是其名也。万物母者天地含三氣生三万物。長大成熟如三母之養子也云々。故常無欲以觀三其妙。常有欲以觀三微。以三大道制三情欲。不害三精神。治三身正則形一。神明千方共湊三己身也。能不知三道之所三常行。妄作三巧詐。精神散亡。故發狂。失三神明。故凶者也。人能守三五性。去三六情。節三志味。清三五藏。或曰。人能養三神則不死也。神謂三五臟之神也。肝臟魂。肺臟魄。心臟神。腎臟精。

脾臟志。五臟尽傷則五神去也云々。清^二五臟^一則天降^二神明^一往^二來於己^一。大道自歸^二己^一。或曰。大道也。天大地大亦大也。布^二氣天地^一無所不通也云々。背^二之則凡也^一。順^二之則聖也^一。

天神地祇為^二大事^一出現。蓋為此耳。

このうち、傍線を付した部分が『老子』本文やその注釈書である『河上公注老子』からの引用であることが確認できる部分である。ここでは、道家の「道」の觀念を援用して天地開闢や神の意義、神人關係のあり方などを説き明そうとしている。これを以てみて、行忠の神道思想に道家思想がいかに大きな影響を与えていたかが窺われよう。行忠の道家思想への関心の深さは、その著『古老口実伝』の中に「如在^レ礼儀用心^レ書」の一冊として「老子経」をあげていることから確認しうるのである。

以上見てきたように、神道論の主要な柱として道家思想を援用する点において『一秘書』と『神名秘書』はその思想傾向を共通にしているといえる。では両者の關係は単にそのみにとどまるかというところではない。両書の内容を子細に比較検討してみると、より緊密な關係が認められるのである。具体例を示そう。

一、『神名秘書』の諾冉^二二神^一の条には次のように説かれている。

(但し、△内は原文では割注の形で記されている。以下同じ。)

天神七代成神伊弉諾尊^{陽神}伊弉冉尊^{陰神}。△此^二二神^一。青檀城根尊之子也。一名号^二伊舍那^一也。乾坤之道相參而化。所以成^二此男女^一。而為^二天神地祇之父母^一。天地万物之性靈者也。凡以^二天

精^二為^レ神^一。以^二地精^一為^レ祇。以^二人精^一為^レ鬼。故謂^二天神地祇人鬼^一是也。亦宗廟云謂^二國家大祖^一也。社稷云謂^二守^レ土^一為^レ社。

守^レ穀^一為^レ稷。老子経云。受^二國之垢^一。是謂^二社稷之主^一。注曰。人君能受^二國之垢濁^一若^二江海不^レ逆^二小流^一。則能長保^二社稷^一為^二一國之君主^一也。事始云。孝経説曰。稷五穀之長。左伝曰。有^二列仙氏之子柱^一。列仙炎帝之世也。自^二夏以上祝^レ之。周棄亦為^レ稷。后稷也。為^二唐官^一。自^二商以來祀^レ之。命配^二祭云々^一。△このうち、(一)の部分は諾冉^二二神^一および天神・地祇・人鬼について説いたものであるが、これとはほ同一の文章が『一秘書』の中に認められる。すなわち、同書「人皇」の項の中の次のような条文がそれである。

(一)蓋天神七代成神伊弉諾尊^{陽神}伊弉冉尊^{陰神}。此^二二神^一一名号^二伊舍那^一天^一也。乾坤之道相參而化。所以成^二此男女^一。而為^二天神地祇之父母^一。天地万物之性靈者也。凡以^二天精^一為^レ神。以^二地精^一為^レ祇。以^二人精^一為^レ鬼。故謂^二天神地祇人鬼^一是也。

次に(二)、(三)は宗廟・社稷について主に漢籍からの引用によって説いたものである。しかるに、『神名秘書』のこの部分も『一秘書』の中ほとんど同じ記述が見出されるのである。まず、(二)の「社稷」の説明の部分であるが、『一秘書』の「社稷神」の項の次のような文章にはほぼ一致している。

(二)社稷神
道経曰。聖人云。受^二國之垢^一。是謂^二社稷之主^一。人君能受^二國之垢濁^一若^二江海不^レ逆^二小流^一。則能長保^二社稷^一為^二一國之君主^一也。

受^二國不祥^一。是謂^二天下之王^一。君能引^二過自與代^一民受^二不祥之殃^一。則可^二以王有^二天下^一也。事始云。孝経説曰。稷五穀之

長。左伝曰。有_二列仙氏之子柱_一。列仙炎帝之世也。自夏以
上祝_レ之。周棄亦為_レ稷。后稷也。為_レ唐官。自_レ商以來祀_レ
之。命配_レ祭。或云。謂守_レ土為_レ社。守_レ穀為_レ稷。

また、宗廟についての(二)の言葉と同一のものは『一秘書』中には
見出せないが、「社稷神」の条のすぐ前に宗廟についての他書か
らの引用が数ヶ条あり、その中に、

(一)大厩始祖廟也。宗廟皆然也。(中略)仁安三年十二月廿八日。
明経博士師元師尚等勅文云。伊勢大神者。日本国太祖之大社
也。

等の言葉があるので、恐らくこれに基づいているのではないかと
思われる。

二、『神名秘書』の素戔嗚尊の根国追放の記事の中に、「解除」に
ついでのような説明(「」を付した部分)がある。

爾乃婦_二罪過於素戔嗚尊_一。而科_レ之以_二千座置戸_一。令_レ解除其
罪。遂降_二於根国_一焉。須_二素戔嗚尊便為_レ冥道神_一座。伊弉諾尊
則天上座。天氣有情惡戒給。伊弉冉尊則地下座。地氣有情惡戒
給。「解除云。上起_二于伊弉諾尊_一。下施_二于天兒屋命_一。是則心
源清淨之儀益故。顯_二自性精明之実智_一。是則仮体不淨之懺悔
故。婦_二無為清淨之本源_一。伝云。念鎮護神国之境。福智円満之
国。遷_二魔縁於鉄際_一。撥_二穢惡於他界_一矣。日本書紀曰。逐之。此
云_二波羅賦_一云々。

三月上巳祓発云。漢代三月上巳日。百官於_二東流水辺_一禊飲。
自_レ魏以後只用_二三日_一不用_二上巳_一。

周禮云。周礼女坐祓_レ除疾病。禊潔。故於_二水上_一潔除。鄭国

俗。三月桃花水下之時。以_二上巳_一。秦洧二水之上執_二蘭葉招_レ
魂統_レ禊祓_レ除不祥_一矣。

後漢有_二鄠虞_一。三月上巳。産_二三女_一不育。俗大忘。至_二其日_一
諱出_二東流水之上_一祈禳矣。

晋三月三日。洛中公主已下至_二南浮橋禊矣_一。√

ところが、この部分もまた『一秘書』の「解除」の項そのままの
引写しである。すなわち、『一秘書』には次のように記されてい
る。

解除云。上起_二于伊弉諾尊_一。下施_二于天兒屋命_一。是則心源清淨
之儀益。故顯_二自性精明之実智_一。是則仮体不淨之懺悔。故婦_二
無為清淨之本源_一。伝云。念鎮護神国之境。福智円満之國。遷_二
魔縁於鉄際_一。撥_二穢惡於他界_一。

日本書紀曰。逐之。此云_二波羅賦_一云々。

覺王開闢神呪仏説云辰朝偶也云々。

白衆等各念。此時清淨偈。諸法如影像
清淨無仮穢。取説不可得。皆從因業生

三月上巳祓発云。漢代三月上巳日。百官於_二東流水辺_一禊飲。

自_レ魏以後。只用_二三日_一不用_二上巳_一。周禮云。周礼。女巫祓_レ
除疾病。禊潔。故於_二水上_一潔除。鄭国俗。三月桃花水下之
時。以_二上巳_一。秦洧二水之上。執_二蘭葉招_レ魂統_レ禊_レ除不
祥_一矣。

後漢有_二鄠虞_一。三月上巳。産_二三女_一不育。俗大忘。至_二其日_一
諱出_二東流水之上_一祈禳矣。晋三月三日。洛中公主已下。至_二南
浮橋禊矣。

このうち、「覚王開闢神呪」の部分が『神名秘書』の文には欠けているが、これは『神名秘書』の他の箇所すでに引いたために抜いたものと思われる。

以上の両書の比較検討によって、両書がきわめて密接な関係を有することは明らかである。というよりも、両書は全く同一人の手になる書であると想定しても大過ないのではあるまいか。少なくとも『神名秘書』が『一秘書』を手元に置いて述作された可能性が濃厚である。

更に、このことを確認しうるのが、先に少しく言及した「覚王開闢神呪」の問題である。この「覚王開闢神呪」なるものは、元來『金剛頂経金剛界大道場毘盧遮那如来自受用身内證智眷属法身異名仏最上乘秘密三摩地礼懺文』(亦の名、『三十七尊礼懺文』)という密教經典の末尾に見えるもので、ここでは次のようになってゐる。

白衆等各念此時清淨偈

諸法如影像 清淨無取穢

取説不可得 皆從因業生

若干の字句の異同(「取穢」↓「仮穢」)はあるものの、「覚王開闢神呪」はこの偈をそのままとり入れたものであることは間違いない。ところで、これが『神名秘書』の中では天岩戸神話に関する記述の「亦令^レ天兒屋命^レ。以^レ広厚称詞^レ祈啓^レ矣」の「広厚称詞」の割注として次のような形で引かれている。

諸神等各念此時天地清淨。諸法如^レ影像。清淨無^レ仮穢取説不可得。皆從^レ因業。 (傍点、筆者)

この文は、明らかに『一秘書』所載の「覚王開闢神呪」をもとに巧

みに字句を改変して作りあげられたものである。⁽⁸⁾

以上、具体例をあげて『一秘書』と『神名秘書』との間に密接な関係の存することを指摘してきたが、これらの点から考えて『神名秘書』の述作に当って『一秘書』が参照されたと考えてよいように思われる。とすれば、『一秘書』は少なくとも『神名秘書』が撰上された弘安八年(一二八五)ないし、その修訂がなされた弘安十年頃までには成立していたことになる。では、その作者は誰か。私はそれを『神名秘書』の作者度会行忠その人であると考え。具体例の一つで、諾冉二神の説明が両書ほとんど一致していることを指摘したが、『一秘書』、『神名秘書』ともに所載の文が他書からの引用である場合にはその出典を明示するのが常である。しかるに、この場合はともに出典を示すことなく載せられているのはそれが両書の筆者自身、すなわち行忠自身の考えを記したものであるからではないか。いずれにせよ、両書の密接不可分な関係からみて『一秘書』の作者を行忠に比定して大過ないものと思われる。行忠は諸先学により神道五部書の述作者に擬せられ、伊勢神道の形成に大きな役割を果たしたと考えられている人物である。彼が特に道家思想に着目していたことは、先述の如く『古老口実伝』により確かめることができるのである。

要するに、『一秘書』は広くみても文永七年から弘安十年頃の間一度会行忠によって述作された書であり、恐らく行忠が神道書を述作する際の手びかえノートの的な書としての役割を果たしていたのではないかというのが私の考えである。

二 神道五部書と『大元神一秘書』

『一秘書』が文永・弘安の頃に度会行忠の手によって述作されたものとすれば、当然のことながら本書と神道五部書との間にも深い関係があることが予想されよう。何故ならば、神道五部書の多くが丁度この文永・弘安の頃に成立したものと考えられており、その述作者として度会行忠が有力視されているからである。そこで以下、神道五部書における外来思想受容の形態と『一秘書』との間に相関関係が存するか否かを検討していくこととする。五部書のうち『倭姫命世記』（以下『世記』と略称する）は『一秘書』の中に引かれており、『一秘書』成立以前に既に存したことが明らかである。また、『造伊勢二所太神宮宝基本記』（以下『宝基本記』と略称する）については鎌倉時代初期の成立とみる見解が有力なので、この両書の検討はしばらくおき、まず『天照坐伊勢二所皇太神宮御鎮座次第記』・『伊勢二所皇太神御鎮座伝記』・『豊受皇太神御鎮座次第記』（以下それぞれ『次第記』・『伝記』・『本紀』と略称する）のいわゆる「神宮三部書」について検討を加えよう。

神道五部書における伊勢神道説の構築に当って、道家思想が極めて大きな役割を果たした点についてはかつて拙稿で明らかにしたところである。それは一つには神観の面においてであり、二つめには神人関係の面である。まず第一の神観の面であるが、具体的には根源神としての国常立尊の解釈の中にそれが窺われる。すなわち『本紀』は次のように説く。

蓋聞。天地未剖。陰陽不分以前。是名混沌。万物霊是封

名「虚空神」。亦曰「大元神」。亦国常立神。亦名「俱生神」。希夷視聽之外。氤氳氣象之中。虚而有霊。一而無体。故發「广大慈悲」。於「自在神力」。現「種々形」。隨「種々心行」。為「方便利益」。(傍線筆者、以下同)

この文の下敷きに用いられたのは『老子述義』の文である。この書は佚書で現在伝わらないが、『本紀』の文に関連する箇所が『一秘書』冒頭の天地開闢に関する文を収めた中に次のように引かれている。

老子述義序云。大象無形獨立陰陽之首。玄功不宰混成天地之先。生万物而莫測其終。妙万物而不知其始。希夷視聽之外。氤氳氣象之中。虚而有霊。一而無体。

つまり、『述義』の説く天地の始源、根源としての「道」の觀念を援用し、「大元神」たる国常立尊を説明したものが『本紀』の記述である。

第二の神人関係の面についてであるが、まず『伝記』に次のような有名な言葉がある。

汝正明聞給倍。人乃天下之神物也。莫傷「心神」。神垂以「祈禱」為「先」。冥加以「正直」為「本」。

この文は、つとに津田左右吉氏の指摘したように、『河上公注老子』第二十九章の注の、

人乃天下之神物也、神物好「安靜」、不可「以有為治」、という言葉によるものであるが、これまた『一秘書』の「官長」の項に「河上公曰」として引用されている。また、『伝記』では神鏡に対する人間のあり方について、

天地開闢之明鏡也。三才所_レ頤之宝鏡也。當_レ受之以_レ清淨_一而求之以_レ神心_一。視之以_レ無相無住_一。

と説くが、これは『河上公注老子』第十四章の注にある。

三者謂_レ夷希微_一也、不可_レ致詰者、夫先_レ色先_レ声先_レ形、口不能_レ言、書不能_レ伝、當_レ受之以_レ静求之以_レ神、不可_レ強詰問而得_一也。

よつて述作したものである。『河上公注』では現象の本体である道が人間の知覚を超越した存在であり、それ故人間はこれに対する心を静寂にし神明（虚なる状態に保つ）にせねばならぬというのである。この道家思想の道と人との関係を『伝記』の文では神体たる鏡への人間の対し方の説明に、字句を変換することよつて応用しているのである。この『河上公注』の文は、直接の引用という形では『一秘書』に見えないが、同書の国常立尊の説明の文中に、

是則名_レ常住_一。曰_レ国常立尊_一。亦号_レ俱生神也。視之不_レ可_レ視。無色無形。口不能_レ言。無心無声。書不能_レ伝。當_レ受之以_レ静。求之以_レ神。不可_レ外求_レ之。詰問之得_一也。

という形で用いられており、更に「祈請事」の項の文中にも次のような形で用いられていて、道家のこの言葉に行忠が注目していたことが分る。

大道者是平常心也。是陰陽之外。至一之境。不可_レ以_レ心識。不可_レ以_レ名言_一者也。當_レ受之以_レ静。求之以_レ神。離一切相_一。無分別心_一。捨_レ道理_一。無氣味_一。可得_レ之_一。思_レ之。

この他、神宮祭祀の国家的性格について『伝記』は

天神地祇大宗。君臣上下元祖也。惟天下大廟也。国家社稷也。

故尊_レ祖敬_レ宗。礼教為_レ先。故天子親耕。以供_レ神明_一。王后親蚕。以供_レ祭服_一。而化_レ陰化_レ陽。有四時祭_一。德合_レ神明_一。乃與_レ天地_一通也。德與_レ天地_一通。則君道明。而万民豊也。

と述べているが、これは『河上公注老子』第十六章の注の、「能王則德合_レ神明_一乃與_レ天通也」「能與_レ天通則與_レ道合同也」という言葉を下敷きにしたものと考えられる。『河上公注老子』のこの部分も『一秘書』の「人皇」の項に「道経曰」として明らかに引用されている。

以上のことから、神宮三部書における神道説に影響を与えた道家の言葉の主なもの、その出典を『一秘書』の中に見出すことができることが明らかとなった。このことは、更に進んで、これら三部書の執筆の段階で『一秘書』が座右に置かれ参照されたのではないかとの推測をも抱かしめるものである。例えば、三部書は「御饌都神」についてそれぞれ次のように説いている。

記曰。以代水德未_レ露。天地未_レ成。瑞八坂瓊之曲玉乎_レ捧_レ九宮_一久。即水变为_レ天地_一利。天地起成_レ天。人民化生_レ須。名曰_レ天御中主神_一。故千变万化。受_レ一水之德_一。生_レ統命之術_一。故名亦曰_レ御饌都神_一也。（『次第記』）

一記曰。伊弉諾伊弉冉尊。八古語曰_レ伊舍那天。伊舍那天妃。▽先生_レ大八洲_一。次生_レ海神_一。次生_レ河神_一。次生_レ風神等_一。以降。雖_レ経_レ廻_レ一万余歳。水德未_レ露_一。天下飢餓。于_レ時_一二柱神天之御量事乎_レ以_レ天。瑞八坂瓊之曲玉乎_レ捧_レ九宮_一所_レ化_レ神。名号_レ止由氣皇太神_一支。千变万化。受_レ一水之德_一。生_レ統命之術_一。故名曰_レ御饌都神_一也。（『伝記』）

御饌都神八是止由氣太神者。水氣元神坐。千變万化。受一水之徳。生統命之術。故名曰「御饌都神」也。√（『本紀』）ここに引く「記曰」とか「一記曰」とは、西田長男氏が明らかにしているごとく、『神祇譜伝図記』をさすものと思われる。すなわち、同書には、

豊受皇太神八亦名大元祖神。亦曰御饌都神。亦天御中主神。√天下飢餓。于時伊弉諾伊弉冉二柱尊。以三瑞八坂瓊曲玉三捧三九空。所化神名号御饌都神。亦名豊宇介皇太神也。

とあり、三部書の記事はこれに潤色を加えて成ったものである。かかるに、その潤色に際しては、『一秘書』の「御饌都神」の項の、大日靈貴則為「日神」也。以為「火性主」。御饌都神則以為「月神」。為「水性主」。故千變万化。受「一水」歸「道」。故強号「御饌都神」也。八衆妙門以「水大」開「闢」之。思之。老子曰。水善利「万物」。√

の如き文が参照されたのではなからうか。

このように見てくると、三部書の述作に当って『一秘書』が参照された可能性が濃厚である。少なくとも両者がきわめて思想的に近い関係にあることは否定できない。とすれば、三部書の述作者は『一秘書』の作者度会行忠その人であった可能性が大であると言つてよからう。

では、残る『宝基本記』と『世記』についてはどうであらうか。まず、『宝基本記』であるが、本書にも三部書同様道家思想の影響が認められる。例えば、神鏡について、

鏡者靈明心鏡也。万物精明之徳。故照「混沌」之前。帰「元始」之

要。斯天地人之三才。当「受」之以「精」。求「之」以「神」。視「之」以「無形顯実」。故則以「無相鏡」為「神明御正体」也。

と説くが如き、『一秘書』や三部書と共通するものがある。ところで、本書の成立については、久保田氏、西田氏ともに鎌倉初期の成立とするものの、その述作者については、久保田氏は内宮祠官説をとり西田氏は外宮祠官の手になるとみるなど見解が分れている。そこで当面問題となるのは、本書が内宮、外宮いずれの側の手によって成ったものであるにせよ、その成立当初より現在伝わるが如き内容の書として存在したのか否かという点である。換言すれば、現存する『宝基本記』には果して後人の手が加えられていないかどうかという問題である。この問題を解く手がかりを、私は『宝基本記』の有名な託宣文の中に求めたい。

天皇即位廿六年丁巳冬十一月。新嘗会祭夜。神主部物忌八十氏等詔。吾今夜承「三」太神之威命。所「託宣」也。神主部物忌等慎無「懈」。正明聞焉。人乃天下之神物祭利。須「掌」静謐志。心乃神明之主也利。莫「傷」心神「一」礼。神垂以「祈禱」為「先」。冥加以「正直」為「本須」。任「其本誓」。皆「令」得「大道」者。天下和順。日月精明。風雨以時。国豊民安。故神人守「混沌」之始。「屏」弘法之息。「置」高台之上。「崇」祭神祇。「住」無式之心。「奉」祈「朝廷」。則天地與「龍圖」運長。日月與「鳳曆」徳遙。海内泰平。民間殷富。各念。祭「神礼」以「清浄」為「先」。以「真信」為「宗」。散齋致齋内外潔齋之日。不「樂」不「用」。不「散」失其正。致「其精明」之徳。「左物不「移」右。兵戈無「用」。不「聞」軻音。「口不「言」穢惡」。目不「見」不「浄」。鎮専「謹慎」之誠。宜「致」如在之礼。背

法而不行。則日月照見給。違文而不判。則神明記識給。惣而神代亡者。人心聖而常也。直而正也。地神之末。天下四国人夫等。其心神黑焉。分有無之異名。心走使。無有安時。心藏傷。而神散去。神散則身喪。人受天地之靈氣。不貴靈氣之所化。種神明之光胤。不信神明之禁令。故沈生死亡夜闇。吟根国底国。因茲奉代皇天。西天真人以苦心誨諭。教令修善。随器授法以来。太神帰本居。止託宣給倍利。

既に指摘したことがあるように、この文章は『無量寿経』巻下の經文を巧みに取り入れながら述作されている（傍線部が直接『無量寿経』によっているか、又はそれを踏まえつつ記された字句である）。ところが、この『宝基本記』の記事の下敷に用いられた『無量寿経』巻下の經文の抜粋が『一秘書』の末尾に次のような形で引かれているのである。

無量寿経下云。
在位不正。為其所欺。妄損忠良。不当天心。臣欺其君。子欺其父。兄弟夫婦中外知識更相欺誑。復不畏王法禁令。如是之惡着於人鬼。日月照見。神明記識。故有自然三塗無量苦惱。』

亦曰。不信先聖諸仏経法。不信行道可得度世。不信死後神明更生。故有自然三塗無量苦惱。苦心誨諭。教令修善。随器開導授予経法。莫不承用。在意願。皆令得道。仏所遊履。国邑丘聚靡不蒙化。天下和順。日月清明。風雨以時。災厲不起。国豊民安。兵戈無用。崇徳

与仁。務修礼讓。』（カギ括弧、筆者）

この引用は『無量寿経』巻下の四ヶ所から抜粋した文より成っている。両者を比較するならば、『宝基本記』がいかに巧みにこの經典の文を取り込んでいくかが分るのであろう。而して、その下敷となつた原典を知る者はまさしくその文章の述作者その人であると見得るのではなからうか。とすれば、『宝基本記』のこの部分は『一秘書』の作者度会行忠の手に成るものと考えられよう。前述の『宝基本記』に見られる道家思想の影響もこの行忠の手によつて付加されたものではなからうか。

以上のことから、私は本書の原本の成立が鎌倉初期であるにしても、現在伝わっている『宝基本記』には行忠の手が加わっているものと推定する。このことは現存する『宝基本記』がすべて行忠の奥書を有することも関わるものであり、彼の手が加えられた時期は、「建治三年丁丑九月二日。称宜度会神主行忠書写之。」との奥書にある建治三年（一二七七）のこととみてよいのではないか。この時期はまさしく三部書の述作期にも当たっているのである。

最後に『世記』について一言触れておきたい。先に述べたように、『世記』の文が『一秘書』に引かれており、従つて本書が『一秘書』に先行する書であることは間違いない。事実、内容的に見ても主に古い縁起書等を材料としており、外来思想による付会もそれほど顕著ではない。特に、『一秘書』を始めとして三部書や『宝基本記』に見られる道家思想による潤色がほとんど認められない点は注目に値する。又、外宮祭神論に関する所説からみても『世記』が三部書に先行する書と考えられることはすでに言及したことがあ

る。これらの点を考えると、『世記』は行忠以前に成立していた可能性が高いように思われる。

三 伊勢神道の形成と度会行忠

これまで私は『一秘書』の述作者を度会行忠とみ、それをふまえて五部書の成立の問題に照明を与えてきたが、この考え方を確固たるものにするためには、『一秘書』に顕著な道家思想への依存が行忠その人の思想的営為によるものであることが証明されねばならない。

神宮祠官の間に縁起を中心とする神道書述作の動きが現われるのは、何も行忠に始まったことではない。『宝基本記』の原形は鎌倉初期まで遡るものであり、又、神宮三部書や『世記』の述作に用いられた『大同本記』も鎌倉初期には成立していたことが明らかである。このことは、平安末から鎌倉初期にかけての政治的・社会的変動の中で、神宮祠官の間にその祭祀の意味を改めて問い直そうとする動きの現われであると理解しうる。他方、同じ頃仏家の側から兩部神道説の形成と唱道の動きが立ち現われ、これが神宮祠官に大きな思想的影響を与えることになる。中でも『中臣祓訓解』の伊勢神道説の形成に及ぼした影響は大である。本書は密教思想によって『中臣祓』を解釈した書で、その成立年代は建久二年（一一九一）以前、六波羅時代のものと考えられている。その成立には、鎌倉中期まで僧侶による神宮法業活動の中心地であった仙宮院が深くかわっていたとされる。この『訓解』が神宮祠官の間に伝えられ伊勢神道の形成に影響を与えたことは『世記』や『宝基本記』・『御鎮

座本紀』等の中に明らかに『訓解』に基づいたとみられる文章が見ることや、行忠の『神名秘書』の中に『訓解』からの引用が存すること等から明白である。⁶⁴

ところで、岡田莊司氏はこの『中臣祓訓解』の伝本を精査し、本書が度会家相伝の秘書であったことを明確にするとともに、『中臣祓訓解』と題する度会常良の書写歴をもつ異本が存し、『訓解』とともに秘書として度会氏の間へ伝えられていたことを紹介、論証している。その中で本稿の課題に関して注目されるのは、この『訓解』の伝本のうち、国学院黒川本・蓬左文庫本・東京教育大学本に建長七年（一一五五）の書写歴を有する「漢朝祓起在三月三日上巳」の一文が合綴されており、その前半部は『神名秘書』の「三月上巳祓発会、漢代三月上巳……」に引用されているとの指摘である。これが事実とすれば、行忠以前既に漢籍類に着目しそれを取り入れようとする動きが神宮祠官の間に存したことが明らかとなり、行忠の営為もかゝる先人の営為の上に行われたことになる。更にもしそこに道家の典籍からの引用が顕著に見られるとすれば、行忠の手によって始めて道家思想に依拠しての伊勢神道論の形成がなされたとする筆者の見方は根本的な再検討の必要をせまられることとなり、ひいては『一秘書』行忠述作説も再考を余儀なくされることになるであろう。筆者は、幸いに国学院大学黒川文庫本を閲覧する機会を得たので、その全文を左に掲げることにする。⁶⁵

漢朝祓、起在三月三日上巳

漢代三月上巳日百官於東流水辺禊飲。自^(上巳)以後只用^(上巳)三月三

日不用^(上巳)。周禮云周礼女巫祓除^(上巳)疾病^(上巳)禊潔。故於^(上巳)水上^(上巳)

禊除。鄭国俗。三月桃花下之時以上巳⁽⁷⁷⁾。漆消於二水上⁽⁷⁸⁾。執業招魂統魄而祓除不祥。

後漢代有「郭鳳」⁽⁷⁹⁾。以三月上巳出東流水之上祈禳。晉三

月三日公主以下至南浮橋禊之。

明念僧正菩提訓說云「南天竺波羅門僧正菩提也」世界自「本法界也。天地自「本神地也。非「仏子無「衆生。非「神流無「人身」。故以「我本「導「衆生。神以「清淨「度「衆生。帝以「要道「教「万民。雖「其教異「是其理一也。

一書曰。天照坐太神現「化權之姿「応同「衆生「垂「跡閻浮」。請「府墮於「魔王」。入「伊舍那天実類之孫大己貴神是也。一名第六天「魔王也」。施「降化之神力」。外顯「異「仏教之「儀約」。内為「仏法之神兵」。

一書曰。推尋「其意「殊不「得爾也。是伊勢兩宮則本來清淨本源阿字不生不滅無想一実妙理也。故不起「仏見法見。無「著想」。故為「本來清淨。有為不淨実執也。無為清淨妙体也。故則虚形鏡表。大空無想之徳。無「尊形。無「相鏡也。万法影歷然也。以「無想無念」為「本。故不起「仏見法見。是無心相不思議觀是也。

或云。古人云。法身如来「種子」位也。尊形「者出胎位也。以「慈悲」為「体。入「觀音妙体也」。伊勢兩宮則周遍法界妙体。無「尊形。自余垂跡則受「法楽「歸「本理」云云。顯「尊形事相」即理故現当「二世益在也。念「想則世間悉地方便教相也。有為法也。出世則無想絶待觀也。

神明者「一切衆生羅網之腰路之鏡是也。明「云「本來明心」也。真如「云「真如」。故則天照太神正「向「南洲」給。神心無「隔処」云「般若」云「如意宝珠」也。云

日 真心如鏡。亦如「家主」。忌心如影。又如「客人」。

神 鏡 水澄月宿。鏡清影顯。教家三身具足。形者心身体。

月 影浮者化身相。空觀者法身理。是天神作制也。心鏡

「心性不動仮立中名已抵三千仮立空称雖「已而存「仮立仮号」。▽

上天解除「祝詞」色即是空空即是色▽

念念「一切諸罪性皆如如是罪性本來空▽

「顛倒因縁忘心起三世之中無所得▽

大日本者大八洲也。大日靈貴治國也。八葉花台也。金剛胎藏諸

會也。大日宮世界国土也。凡世界自「本本覺也。自「本無明也。

本又法界也。本是本仏也。本者法然道理也。

大梵王宮遷造之心御柱「八名」天ノ御量柱「一」ハ名「天ノ御柱」

一「ハ名「齊柱」昔「天地去テ未「遠。故以「天ノ御柱」拳「於天

上」也▽凡此御柱者天地開闢之本基。諸神自己之惣体也。

大日靈貴宝座。法界卒都婆。文殊三昧形独古。亦本來清淨不生

不滅周遍法界一心柱是也。竜神守護給。不動明王栗柄也。

尚書曰。惟天地「万物父母。惟人「万物之靈」。入「注曰生之謂

父母者靈神也▽

建長七年九月十三日 実忠写之 禰宜正四位上度会神主常良拜写

以上が『記解』合綴部分の全文である。岡田氏の指摘された通り、冒頭部は『一秘書』や『神名秘書』に載せる「三月上巳祓発云」以下の文と同文である。しかし、それ以降の部分は、末尾の『尚書』からの引用一条を除き、密教教理にもとづく神道説から成っており、道家思想の影響が全く存しない点が注目される。建長七年とい

えば、行忠は二十才で外宮八禰宜を勤める青年神官であり、⁴⁰⁾まだ神学修業時代であったものと思われる。ちなみに行忠が『神名秘書』を撰上するのは、この三十年後、弘安八年のことである。この行忠の青年時代の神宮祠官層の教養は、若干の漢籍への関心はあったものの、兩部神道への傾斜が著しかったものと推測される。このように見てくると、道家思想を導入したことによって兩部神道から独立した伊勢神道教説を樹立したのはやはり度会行忠の営為によるものと考えざるを得ない。

おわりに

以上、私は『大元神一秘書』の著者と成立時期、及び『一秘書』と五部書との関係という二つの問題点の解明を軸として、伊勢神道の形成について検討を加えてみたが、その結果

一、『大元神一秘書』は度会行忠の手によって述作された書であり、彼が神道書を述作する際の手控えノートの性格の書物であったと推測されること。

二、神宮三部書の外来思想と『一秘書』の内容との間には共通の思想傾向が認められるだけでなく、具体的な影響関係も若干考えられることからみて、通説に説かれるように三部書の作者を行忠とみるのが妥当であること。

三、従来、鎌倉初期のものとされている『宝基本記』にも行忠の手が加えられている可能性が強いこと。

四、伊勢神道の形成に大きな役割を果たした道家思想の導入は行忠によってなされたと考えられること。

等の点を明らかにし得たものと思う。

伊勢神道の成立やその思想については、その著作が古人に仮託されていて成立時期や作者をなかなか明確には断定しにくいこと、仏教・道家・儒教等のさまざまな外来思想が援用され一見きわめて雑駁な様相を呈していること、等々の難しい問題があるため未だ十分な解明がなされているとは言い難い。しかるに、本稿において明らかにした如く、『一秘書』が伊勢神道の創唱者ともいうべき度会行忠の座右ノートの書物であったことが認められるならば、この書物を軸として伊勢神道の形成の問題を考えるという新しい視角が可能となるであろう。また、本書に引用されている外来思想を詳細に分析することによって、伊勢神道の思想構造が明確になることが期待される。

注

- (1) 『統群書類従』第一輯下所収本による。
- (2) 『倭姫命世記』冒頭の文は次の通りである。
天地開闢之初。神宝日出之時。御饌郡神与_レ大日靈貴。豫結_二幽契。永治_二天下。言寿寘。肆或_レ為_レ月_レ為_レ日。永懸而不落。或_レ為_レ神_レ為_レ皇。常以_レ無窮。光華明彩。照_二徹於六合之内_一以降。(以下省略)
- (3) 西田長男氏、「度会神道成立の一斑―新出の『神祇譜伝凶記』に沿って―」(同氏著『日本神道史研究』第四卷所収)参照。
- (4) 久保田収氏、『中世神道の研究』第一章三「伊勢神道書の成立」参照。
- (5) この表は暫定的に作成したものでかなり不完全なものであることをお断りしておく。表中に「……………曰(云)」とあるのは当該

書中にその言葉を確認していないか、又はその書物自体が現在伝わっておらず確認不能のものであることを示す。

- (6) 日本における老子の受容について武内義雄氏は平安から鎌倉室町にかけては河上公注が流行し、それが近世にはいと林希逸の口義にとつてかわられること、中世までは賈大隱の述義も広く読まれていたことを指摘している（『日本における道莊学』、全集第六卷所収）が、この傾向は『一秘書』における道家の典籍の引用の実態と一致している。なお、賈大隱の述義は散佚して伝わらないが、本書の他、度会家行の『類聚神祇本源』にも佚文が十条見出され、河上公注とともに伊勢神道家が尊重していたことが分る。

大正新修太蔵經第十八卷所収。

- (8) (7) このいわゆる「覚王開闢神呪」は早く『中臣祓訓解』の中に次のような形で引かれている。

天津宮事ハ諸法ハ影像ノ如シ。清淨ニシテ瑕穢無し。取説不可得なり。皆因業より生ズ。▽

神ノ宣命なり。祝詞なり。謂はク、之を宣レバ即ち一心清淨ニシテ、常住円明ノ義益すなり。是れ淨戒波羅密多を修するなり。之を觀ズレバ不可得ノ妙理なり。

それ故、この神呪は元来両部神道家の注目するところであつたもので、それが伊勢神道に取り入れられたものであらう。

- (9) 『神名秘書』の成立過程については、まず弘安八年の撰上本が成り、次いで弘安十年七月以後そう遠くない時期に「重檢旧記・加執捨」えたものが現在の広本であり、更に正応六年以後に広本をもとに新たに撰述されたものが略本であるとされる（久保田取『中世神道の研究』、三六一—四〇頁）。本稿で問題としているのは広本であるが、『一秘書』との関連部分が弘安十年以後の修訂の際に加えられた可能性もいちがいには否定できない。ともあれ『神名秘書』の成立過程については問題が残されており更に詳し

い検討が加えられねばならない。

- (10) これら三書は当時より「神宮三部書」と呼称され一括して取扱われており、いずれも文治元年度会高倫が書写した旨の奥書を共有している。故に相前後して述作された一連の書と見ることができ、内容的にも相互に密接な関係が認められる。（詳しくは、久保田氏、前掲書、一一—一八頁参照）。
- (11) 拙稿、「伊勢神道の形成と道家思想 神観を中心として」（『東北大学日本文化研究所研究報告』第一三集）参照。
- (12) 西田長男氏、前掲論文参照。
- (13) 『宝基本記』の成立期の問題については、拙稿「神道五部書成立私考」（『東北福祉大学紀要』第四卷第一号）を併せ参照されたい。
- (14) 『中臣祓訓解』の成立時期及び伊勢神道との関係については、久保田取氏、前掲書八八一—一〇〇頁参照。
- (15) 岡田莊司氏「『中臣祓訓解』及び『記解』の伝本」（『神道及び神道史』第二七号）参照。
- (16) 返り点、送り仮名は原本のままとしたが、読点は筆者が試みに付したものである。
- (17) 『外宮禰宜年表』による。

〔付記〕 本稿のうち、「一、『大元神一秘書』の述作者とその成立時期」の部分は、昭和五十四年度日本思想史学会大会において、「『大元神一秘書』と度会行忠」の題で口頭発表したものである。